

混沌とした中から

プリンタについて(その1)

懐かしいパソコン雑誌を見ていたらプリンタの宣伝がありました。そういえばプリンタもいろいろ変わって来たものだと思って書いてみようと思います。ただし、特に参考文献がないので内容は非常に怪しいものになる可能性がありますので、その点ご了承ください。

さて、現在プリンタといえば家庭用としてはそのほとんどがインクジェット式になっているようです。それもカラーが中心（中心というよりもカラー以外売っていない気もするのですが）となっています。個人的に購入したプリンタの初めはエプソンのドットインパクトプリンタです。そのほかに熱転写式や今もまだちょっと高価なページプリンタなどがあります。ざっと並べてもしょうがないのでそれぞれについての説明をしてみます。

プリンタとはちょっと違うようで同じなのですがまずはタイプライタの話からしたいのですが、近頃はタイプライタも説明しなければならぬのでしょうか。タイプライタはよくちょっと古めの外国映画に出てくる会社の秘書が使っている文章を作成するためにもので、キーを押すと機械的に動いて、紙をインクリボン越しに文字が彫ってある印字バーでたたくことによって紙に文字を印刷するものです（具体的にイメージはhttp://ecows.econ.niigata-u.ac.jp/~nagai/gairon_d/pic/type.htmlの写真をみてください）。印字バーは1つのキーとつながっていて、上下でShiftを押した場合の印字もできるようになっています。昔のは自分の指の力で印字をしていたのですが、そのうちに電動のものも出てきました。紙はキャリッジというローラ状のものに巻きつけて装着されていて、タイプライタは1字打つと1文字分紙が移動するようになっています。紙は基本的には連続紙というわけにはいかないもので、1枚ずつキャリッジに挟み込んで使用していたものです。紙の幅は設定するとあと残り数文字になると「チン」となって終わりを教えてくれました。端っこまで行くともちろんこれも手動で紙を挟んだキャリッジの左側についているレバーを引くと一行分紙を動かして紙全体を左端の次の行の初めに移動させたものです。この1行移動させることがラインフィード（LF）で紙を巻くところをキャリッジ(carriage)というのですがこれを戻すことをキャリッジリターン（CR）といいます。このLFとCRは現在でもデータの構成を指定するときに使われています。そのうちに電動になるのですが、手動のものをそのまま電動にすると大変なのと印刷のフォントなどを変えたり高速印字するためにこのハンマー部分を球形にしたものが登場しました。そういえば、現在のキーボード配置は通常「QWERTY」ですが、これを効率的な配置と考えているかもしれませんが、19世紀に考え出された配置で、右と左を交互に打つことによって上で説明した機械式タイプライタの印字バーが絡みにくいようになっているものです。もちろん英語圏の話で、実際はもっといい配置がありそうですが、あまりにもタイプライタの配置が定着しているために現在まで利用されているようです。各国それぞれいろいろなキー配置があるようです。余談ですが、日本語タイプというものもありました。これは会社の契約書などを作るために利用されたもので、四角いテーブルのようなものに漢字やひらがななどがびっしり印刷されたもので、印字したい文字の上でレバーを操作するとその文字の活字が選択され紙の上に印字される構造になっていました。とても簡単に文章を打てるものではなく、特殊技能を持った人が使っていたような覚えがあります。（次回へ続く）

(今週の情報誌から)

○日経エレクトロニクス 8月28日号

特集 医療・健康を攻める

→医療・健康分野へエレクトロニクスメーカーの参入が相次いでいる。医療分野では電子カルテ、遠隔診断、診断機器の小型化など、健康分野ではセンサの小型化、家電との連携、健康アドバイスなど。参入は医療分野から家庭へと身近になっている。

○日経SYSTEM 9月号

特集 開発ドキュメントの作威力

→システム開発の成功、失敗はドキュメントにかかっているといっているほど開発ドキュメントの重要度が増している。どのようなドキュメントが求められているか。

○NETWORK WORLD 10月号

特集 ネットワーク管理者のためのログ収集・管理マニュアル

→以前はシステムが正常に動いているか確認するためのものだったログ。最近では情報が正しく扱われているかどうか、業務が正しく遂行されているかどうかの管理に用いる。ログはどのように取得して、保存して、管理すればよいのか。